

地域創造に関わる高大連携事業の実践

—兵庫県立村岡高等学校と鳥取大学地域学部の連携事例をもとに—

武田信吾*・筒井一伸**・関耕二*・小泉元宏***・安田真人****

A Cooperative Project between High School and University
regarding Regional Creation:
A Case Study of Hyogo Prefectural Muraoka High School and Faculty
of Regional Sciences, Tottori University

TAKEDA Shingo*, TSUTSUI Kazunobu**, SEKI Koji*, KOIZUMI Motohiro***,
YASUDA Masato****

キーワード：高大連携，地域創造，地域系高校，地域学

Key Words: Cooperative Project, Regional Creation, Regional Education type High School, Regional Sciences

I. 緒言

高大連携の取り組みは、従来は大学教員による出前授業や高校生の体験入学など進路学習に類するものが一般的であったが、最近では、高校と大学が互いの教育活動に参画し、改善・充実に寄与するものも行われている¹⁾。前者は一方的的で単発的である場合が多いが、後者は明らかに双方向的で持続的な性格を有しており、今後の高大連携事業を推進する方向性として期待されている²⁾。

本稿は、兵庫県立村岡高等学校（以下、村岡高校と記す）と鳥取大学地域学部の高大連携事業を取り上げる。村岡高校は、少子高齢化が進む中山間地域に立地し、学校の存続は地域社会の存続と不可分な関係性にある。学校は未来の地域を担う人材育成の場でもあり、まちづくりの拠点にもなっている、いわゆる地域系高校である³⁾。一方、鳥取大学地域学部は、地域課題の発見と解決について学際的なスタンスでアプローチする教育研究機関であり、地域のキーパーソン育成を標榜する。つまり、両者はともに地域を志向する教育機関である。自動車を用いれば1時間程度で移動が可能な位置関係にあり、互いのミッションに対して双方向で関わり合う状況が恒常的に続く間柄となっている⁴⁾。現在、村岡高校の所在地である兵庫県美方郡香美町をベースとして、持続可能な地域社会の創造に資する教育実践が行われており、その多様な参画フェーズの成立背景と実施プロセスについて、事例紹介も交えながら論じていくことが本稿の主たる目的である。

学校と地域創造を一体的に捉えた取り組みは今に始まったものではなく、戦後の地域教育計画論の実践以降、様々な形をとって展開されてきた⁵⁾。ただし近年は、東日本大震災（3.11）とその復興などを契機としつつ、地方創生の時流も後押ししながら、学校と地域のつながりや結びつきを見

*鳥取大学地域学部地域学科人間形成コース

**鳥取大学地域学部地域学科地域創造コース

***立教大学社会学部現代文化学科

****兵庫県朝来市立梁瀬中学校

直そうとする動きが、国の施策としても加速度的に進んでいる。例えば、『第2期教育振興基本計画』では、「少子化・高齢化が進行し生産年齢人口の大幅な減少等が予想される中で我が国が持続可能な発展を遂げていくために、(中略) 学びを通じて自立・協働型の社会づくり、地域づくりを推進していくことなどが求められる」との方向性が打ち出されている⁶⁾。また、中央教育審議会の答申『新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について』では、「今後は、子供たちを社会の主体的な一員として受け入れ、子供も大人も含め、より多くの、より幅広い層の地域住民が参画し、地域課題や地域の将来の姿等について議論を重ね、住民の意思を形成し、様々な実践へとつなげていくことが重要である」との見解が示されている⁷⁾。それらを受けて文部科学省は、『「次世代の学校・地域」創生プラン～学校と地域の一体改革による地域創生～』のなかで、「先進事例の収集・発信を行うとともに、全国フォーラム等の開催を通じて地域学校協働活動及びコミュニティ・スクールの全国的な推進の機運を醸成する」と述べている⁸⁾。地域コミュニティは教育の基盤であり、学校等もまた地域課題の解決にとって重要な存在となるとの考え方が、今後は一層浸透していくことになるだろう。学校教育と地域社会が相互に好影響を与え合いながら、組織的かつ継続的に関わり合っていくために何が必要なのか、各地で積み上げられてきた事例は、今一度、丁寧に検証される必要がある。左記の検証において、本稿は、地域志向の高大連携という独自のスタンスから話題を提供するものとなると考える。

なお、本稿の構成は次の通りである。この「緒言」(武田が担当)に続いて、Ⅱでは、香美町地域おこし協力隊の隊員であり村岡高校の教育コーディネーターでもあった安田(現朝来市立梁瀬中学校教諭)が、村岡高校における教育計画の全体像について解説する。Ⅲでは、鳥取大学地域学部より筒井(Ⅲ1, 4)、関(Ⅲ2)、小泉(Ⅲ3・現立教大学)、武田(Ⅲ5)が、教育実践への参画状況を担当学年ごとに紹介する。Ⅳでは、小泉(Ⅳ1)と関(Ⅳ2)が、村岡高校に設置されている2つの教育課程について、それぞれの教育実践の成果と課題について述べる。最後のⅤでは、結びに代える形で、安田より村岡高校で教育コーディネーターを務めた3年間を振り返る。

Ⅱ. 地域創造に取り組む村岡高校の挑戦

村岡高校は、地域の活動に参加し、地域の課題を解決する学習を通して、地域を支える人材を育成する「地域の学校」と、地域の自然を活用し特色あるアウトドアスポーツを学ぶ全国募集の学校の二つの側面を持っている。現行の「地域アウトドアスポーツ類型」の前身となる「地域創造類型」を2011年度設置し、2014年度「地域アウトドアスポーツ類型」に改編した。この類型は、鳥取大学地域学部と連携し、地域課題を調査・研究し、行政に提案する「地域創造系」と、スポーツ理論やスポーツを活かした地域活性などを実践的に学ぶ「アウトドアスポーツ系」から構成され、村岡高校が掲げる「地域なくてはならない高校づくり」を具現化する柱の一つとして位置付けられている。

「地域創造系」は、前身の「地域創造類型」と同様、郷土について知り、探求の方法を学びながら、地域との共生を目標に地域の活性化に努め、進路目標に沿った授業を展開している。1年次で地域資源について理解し、2年次で地域を調査し調査結果を分析する。3年次では、分析した結果を地域の課題解決に活かすために、提言する活動を行っている。先述のとおり、鳥取大学地域学部と連携しているため、地域課題を体系的理論的に探求し、地域の課題解決を目指す取り組みを行っている。

「アウトドアスポーツ系」は、中山間地域の自然に恵まれた立地環境を活かし、冒険教育やスキ

一などの体験学習の他に、スポーツでの地域活性化案を企画し、実践する取り組みが始められている。例を挙げると、香美町教育員会や福祉課と連携し、「香美町ウォーキングマップ」の製作に協力したり、地元にある野外教育施設の指導・協力のもと、スポーツイベントを企画し、高校生がスタッフとなり実践しようとしている。

地域創造系でも取り組むテーマは、学年ごとに異なっており、鳥取大学地域学部との連携のもと、各担当大学教員の専門性を活かしたテーマ設定で取り組んでいる。鳥取大学地域学部より講師として年間3～5回程度高校に招き、探求活動をより体系化・理論化していく上でも重要な役割を果たしている（表1）。また3年間の学びを成果物として製作している（表2）。

表1 平成28年度学校設定教科「地域探求」の内容

学年	系	講師	主なテーマ
1年	地域創造	鳥取大学地域学部	国際的、文化的、芸術的な地域資源の発掘と活用
		兵庫県立大学 地元講師	地域の歴史・自然の学習
	アウトドアスポーツ	専門学校講師 地元講師	スポーツ基礎理論の習得 アウトドアスポーツ体験
2年	地域創造	鳥取大学地域学部 香美町教育委員会	ふるさと教育の体系化
	アウトドアスポーツ	神戸山手大学 うづかの森	産学連携によるスポーツツーリズムの創造
3年	地域創造	鳥取大学地域学部 香美町企画課	集落の魅力発信プロジェクト
	アウトドアスポーツ	鳥取大学地域学部 香美町教育委員会	ウォーキングコース・マップづくり

表2 これまでの取り組みや製作物の一例

卒業年度	取り組み／製作物等	学年担当講師	主なテーマ
2013	『かみ＊あう』	筒井一伸氏 (地域政策学科)	人物紹介図鑑の作成
2014	『笑顔に出会える瞬間 みかた残酷マラソン お・も・て・な・し』	関 耕二氏 (地域教育学科)	スポーツによる地域活性化
	『スポーツイベントを通しての 地域活性化』(活動報告書)		
2015	『Re/Map』(DVD)	小泉元宏氏 (地域文化学科)	Re/Map もう一つの香美の発見
2016	小規模集落サミット	筒井一伸氏 (地域政策学科)	集落の魅力発信プロジェクト
	『集落ガイドブック』(予定)		

毎年校外で開催される「教育講演会」や地域住民と全校生が参加し、講師を招いて地域活性化についてディスカッションする「村高フォーラム」などに鳥取大学地域学部から助言や当日の進行役を引き受けていただき、会を円滑に進めるためにご支援をいただいている。

「村岡高等学校地域創造教育サポーター（以下、サポーター）」を設置しており、これまでに鳥取大学から延べ16名の学生がサポーターとして、村岡高校で実施される授業に参加している（2017年6月現在）。サポーターの存在は、大学が近隣にない高校生にとって、年齢の近い大学生から知的な刺激を受ける機会にもなっており、今後も大学生と高校生が「地域」をキーワードにしたつながりを強めていきたい。さらに学校運営連携協議会のアドバイザーとして鳥取大学地域学部の山根俊喜教授にお願いし、学校運営の方向性の確認にも大いに効果をあげている。

Ⅲ. 多様なフェーズで参画する鳥取大学地域学部

1. 第1期実践「地域の“格好いい”オトナを高校現場へ」

筆者（筒井）は2011年に発足した村岡高校地域創造類型のカリキュラム立ち上げ時期からかかわっている。発足当初、村岡高校の特色化を図るために特徴ある科目として「地域を知り、地域を研究し、地域に提言する」を目標とする学校設定科目「地域探求Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」を設け、地域活性化について調査・研究する探求学習を行うことが決まっていた。しかしながら「地域を探求する」その中身については村岡高校教諭と筆者とが話し合いをしながら創り上げていった。筆者が専門とする過疎研究では、過疎の主たる原因の一つとして「住民意識の後退」⁹⁾を挙げ、さらに地域を誇らない大人の振る舞いが若者を都市へ押し出すという形式で理解されてきた。一方、香美町を見回すと地域で頑張る格好いいオトナがいることに気付いた。そこで、普段、高校の教員と自分の親以外にはあまり大人と接することが少ない高校生と、この“格好いい”オトナを結び付けようと企画し、2011年度から2013年度の地域創造類型1期生（村岡高校第52期生）が行ったのが、人と会うための香美町人物ガイドブック作成のプロジェクトである。

筆者は地域政策学科専門科目「むらおこし論」でワークショップを取り入れた実践型教育を鳥取県日南町で展開してきたこともあり、ワークショップを高校現場に取り入れた。ワークショップにはいろいろな意義、捉え方があるが、参加の場づくり¹⁰⁾のツールとして筆者は位置づけてきた。そのため格好いいオトナ＝地域住民を教室に呼び込んで、高校生とコラボレーションをする仕掛けを徹底した（写真1）。一方で、目に見える成果物を作り出すということも高校生の自信を高める上では重要である。そこで恰好いい地域のオトナを通して見えるすてきな香美町を高校生が描き出すことを試みた。実はこれにはお手本がある。まず筆者が学生を地域づくりインターンとして派遣していた山梨県早川町の「2000人のホームページプロジェクト」¹¹⁾であり、もう一つは地域づくりにおいても高校魅力化においても有名な島根県海士町を題材に2012年に刊行された『海士人』¹²⁾である。いずれも秀逸な取り組みである一方、高校生がそれを実践した例は管見の限りでは見当たらなかった。幸い海士町の山内道雄町長は地域学部の「地域学入門」の授業担当をお願いしていたこともあり、村岡高校生が授業を受ける一方、海士町へも村岡高校生が赴いて、『海士人』を手掛かりに話を聞くという実習を実施した。



写真1 地域のオトナとの対話場面

実際の進め方として、ワークショップの実施やインタビュー調査の調査票作成などについては筆者が多く関わり組み立てをしていった。その過程で地域学部学生にもかかわってもらった必要が出てきたため、村岡高校には「地域創造教育サポーター」という制度も作っていただき、実際に委嘱をした地域学部学生がワークショップのファシリテーションを担うことも行った。一方で、実際のインタビュー調査や原稿作成に関しては村岡高校の教職員の方々に積極的に関わっていただいた。大学生とは異なり、高校生“だけ”で調査を行うことは交通手段等の条件などからも難しく、高校現場の教職員のみなさんが頼りである。学校現場に教職員や保護者ではない大人が入り出す高校現場も珍しいであろうし、インタビュー調査のために町内を走り回ること通常の高校教育ではないと思われる。そのようなことを展開するこのテーマを受け入れた村岡高校の現場力には目を見張るものがある。

成果は『かみ*あう—COME&MEET』（写真2）として発行をしたのでそれをご覧いただきたいが、このガイドブック作成過程でかかわっていただいた“格好いい”オトナの多くがその後の村岡高校の展開にもかかわっていただいている。その意味で村岡高校が「地域創造」を始める最初の取り組みとしては適したものであったと言える。



写真2 生徒作成ガイドブック『かみ*あう』

2. 第2期実践「高校生からみたスポーツと地域課題」

村岡高校で「地域創造類型」がスタートして、2年目の学年（2012年4月入学、2015年3月卒業）の特別非常勤講師として、鳥取大学地域学部から筆者（関）が担当した。1年目は、他の学年と同様に兵庫県北部を中心とした地域課題の学習や体験などであったが、筆者の担当する授業時間では「健康」や「スポーツ」をキーワードに、課題を考えるように進めていった。当初、村岡高校の高校生も教員も、山間部の少子高齢化問題や医療問題、さらにはスポーツと観光、スポーツ施設の老朽化など、どこの地域にも起こりうる課題をイメージしていた。しかし、村岡地域特有の課題という絞り込みを行っていくなかで、豊富な自然環境を活用したスポーツや地域活性化への視点へと移っていった。筆者が様々な環境下での身体活動が心身に及ぼす影響に興味を持っているということもあり少し軌道修正を試みたが、もともと村岡地域には、自然環境を活用したスポーツがしっかり根付いている地域であった。そのため、まずは村岡地域のスポーツと地域課題の現状把握をすることとした。

この中で、明らかとなってきたことは、村岡地域ではユニークなランニングイベントが継続的に開催されていることと、冬季には積雪がありスノースポーツが盛んな地域ということである。特に、ランニングイベントについては、近年になって新たに開催されている一般的な都市型マラソン大会とは異なり、高低差が多いコースや、距離が極めて長いコースなど特徴あるマラソン大会が20年以上前から開催されているということであった。そこで、地域創造類型2期生のテーマを「スポーツイベントを通しての地域活性化」として設定して、学習を展開していくこととなった。具体的には「みかた残酷マラソン」及び「村岡ダブルフルウルトラランニング」というマラソン大会が対象となったが、村岡高校は地域創造類型として学習を展開していく以前から、これらの大会の運営協力をし、生徒と教職員が実行委員会や地域住民と一体となって大会をサポートしていた実績があっ

た。したがって、それぞれのマラソン大会については、生徒や教職員にとって身近な課題であった。その他、新たに地域で企画された「但馬牛ゆったりウォーク」というイベントも検討対象となった。

1年生時には、インターネットや文献などから生徒が探し出した他のマラソン大会の事例やスポーツイベントによる地域活性化の事例などを紹介し、村岡地域での応用や村岡地域の既存のスポーツイベントの違いを検討した。また、それぞれのイベントの主催者からお話を聞き、イベント立ち上げの経緯や今日までの苦勞、今後の課題などをうかがった。さらに、それぞれイベントの運営サポートを生徒が行った際に感じたことを中心に、それぞれのイベントについて高校生からみた魅力と課題について議論した。それらの議論を踏まえ、高校生の疑問としては「なぜ、わざわざ村岡地域に走りに来るのか」「どんな人が来るのか」「宿泊しているのか」などイベントの魅力や経済効果に関する疑問が多く出された。そこで、2年生時には、それぞれの大会で、イベント参加者にアンケート調査を実施することとなった。

2年生時には、実際の「みかた残酷マラソン」及び「村岡ダブルフルウルトラランニング」において、アンケート調査を実施した。アンケート調査の結果については、後に報告書としてまとめて公表した¹³⁾。アンケート調査は、ゴール直後のランナーが休憩しているところへ、高校生がアンケート用紙を持って直接、インタビュー形式で質問していくのであったが、既定の質問以外にも多くの会話が生まれ、参加者の本音を探ることができた(写真3)。このインタビュー形式のアンケート調査の経験は、後に高校生のコミュニケーションや社会に対する考え方において成長を促すものとなっていた。アンケート調査の分析に際しては、高校生が情報処理の授業なども活用して、データ入力から図表の作成を行っていった。これらの分析結果を基に、プレゼンテーションを行い現状把握と課題を検討した。この際、図表化したデータ以外に、高校生がインタビューのなかで直接、参加ランナーから聞いた要望や自分たちで感じた課題などが活発に議論され、実行委員へいくつかの意見や改善提案がなされた。それらを受けて、3年生時の大会の際には高校生の提案した企画が実際に採用された。データ分析の結果や高校生の実感としては、「給水所やトイレが少ない」「名前を呼んで応援されるとうれしい」といった大会運営に関することや、「大会には満足しているが村岡地域の他の良さをもっと知ってもらいたい」といったイベントに付随する地域の魅力発信力についてであった(写真4)。

そこで、3年生時には、2年生時と同様にイベントの運営サポートとアンケート調査を実施した他、高校生が企画した「高校生運営の給水所」や「名指し応援隊」の実施や、ゴール付近に「地域の魅力発信ブース」を設置し高校生が主体的に活動していった。その後、自分たちが企画した活動に関する反省や検証を行い来年度へ繋げる検討を実施することで、高校生独自のPDCAサイクルを軌道に乗せていった。この活動は、現在も彼らの後輩が継続して行っている。尚、3年生時には卒業論文



写真3 マラソン参加者へのアンケート調査



写真4 実行委員も交えた調査分析

ということで、3年間の活動を振り返り高校生それぞれの視点で「スポーツイベントによる地域活性化」についてまとめ、「みか残酷マラソン」についてはリーフレットも作成し地域の魅力発信にひと役買っている¹⁴⁾。

3. 第3期実践「フィールド調査の積み上げによる地域の魅力の（再）発見」

筆者（小泉）は2013年4月から2016年3月まで、村岡高校の特別授業「地域探求Ⅱ」を担当した。受講生は10名である。授業では、「地域の魅力を（再）発見するにはどうしたら良いか」をテーマとして掲げながら、一部講義を含めつつ、演習・実習形式を中心に進めていった。また上記のテーマのもと、生徒各自が地域の多様性や複層性を知り、また、社会（社会科学）や文化（人文科学）、環境（自然科学）のなかから地域にかかわる課題や関心事を見つけ、見つけた課題等を通じて「調査・研究・発表すること」への関心を生徒たちが得ることを上位目標とした。具体的には、問いの設定や、フィールド調査など方法論のまなび、調査、議論、発表、成果物制作などを、村岡高校の教員や地域おこし協力隊の方々の協力を得ながら、企画・実施した。

特に重視したのは、フィールド調査の方法論や発表、成果物制作において、音楽や写真、映像といったメディアを積極的に用いながら、五感を用いて地域の魅力を捉えることを試みた点である。そのために、導入としてサウンドスケープに関する講義や実践を行ったり、また、まちあるきを通じて得た気づきから、地域社会の歴史や文化、環境を先入観に囚われずに脱構築し、映像によって「再地図化」する試み（「RE/MAP 香美」）に関する講義や実践を行ったりといった工夫を加えた。研究発表および成果物も、生徒が主体となり、スマートフォンやPCなどを用いて、自ら撮った映像素材（インタビューデータなどを含む）を編集し、映像作品のかたちで制作している。

実際の授業は、おおむね次のような流れで進めていった。まず、当初は、「地域の魅力を（再）発見するにはどうしたら良いか」をテーマとした講義を、生徒の議論参加も交えて行った。文化社会学や消費社会論の視座を中心としながら、与えられた見方ではなく、自ら社会の課題や特徴を見出すための探求を進めていくこと、さらに、自ら活動を展開していくことの重要性を、ビジュアル資料を多く用いながら論じた。講義の回数は、合わせて数回分程度であったが、同様の視座を含んだ内容を、生徒が3年生になるまで、随時、繰り返し説明していった。

次に、村岡高校周辺地域のまちあるきの他、対照事例として、①鳥取市市街地、②鳥取県東伯郡湯梨浜町松崎地区、③島根県隠岐郡海士町の各所のまちあるきを行うことで、自身の住まう（通う）地域である香美・村岡の特徴を相対化させることを促した（写真5）。これらの活動の多く（③海士町以外の各所）では、大学生と一緒にまちあるきし、あるいは発表を行うことで、他者の目に、自身のまちやそれぞれのまちがどのように映るのか、また地域をみる目や研究する目について考えるきっかけを作った。また松崎地区では、古民家を改装し、ゲストハウス・シェアハウス・カフェを併設した事業を進める、合同会社「うかぶ LLC」の蛇谷りえ氏（デザイナー）や三宅航太郎氏（アーティスト）のトークを聞いたり、地域住民が主催するまちづくりイベント（「三八市」）において大学生が研究発表を行う機会に参加したりして、まちの魅力を再発見し、活動を進めていく実践や研究調査、発表の実例を学



写真5 村岡高校生・鳥取大学生合同まちあるきのようす（鳥取市市街地）

んでいった。村岡高校生によるプレゼンテーションを行う機会も随時設けている。

以上を踏まえながら、最終学年では、生徒たちを3~4名ずつ3グループに分け、改めて自らの地域のまちあるきを行い、引っかけた点を中心に「問い」を立てることを促した。結果、地域の歴史や文化、自然に関する以下のテーマを生徒が策定し、文献調査のほか、スマートフォンを用いた映像撮影、インタビューなどを各グループが行った。

「ひと」グループ：テーマ「時代よ さかのぼれ〜こども大名行列を探る」

かつて行われていた参勤交代を再現するかたちで行われている「こども大名行列」をテーマに、活動に関わったり参加したりしている人物へのインタビューを通じて、活動のために高校生ができることは何かを探った。

「歴史」グループ：テーマ「村岡ふしぎ発見！」

鎌倉時代、但馬の卓越した地頭であった東入道（東和泉入道浄有）の墓の場所にまつわる諸説を探るため、地域の歴史に詳しい人物らに話を聞き、諸説が生まれた背景や、実際の墓の場所などを探った。

「自然」グループ：テーマ「自然が織りなす魅力歴訪〜吉滝の魅力を訪ねる」

地域の景勝地の一つ「吉滝」について、それが「うらみ滝」（裏見の滝）と呼ばれる由縁をテーマに、インタビューやフィールドワークを交えながら、滝の特徴や、名称の由来などを探った。

以上の内容は、グループごとの中間発表や批評会を経て内容を練り上げ、映像を、PCソフトを使って編集し、音楽や字幕の追加などを行ったうえで、5~10分程度の映像作品とした（写真6）。さらに最終発表ののち、各グループの内容をまとめてDVD化（一部は自ら作成、その他は地元の業者に発注）して、成果物とした（写真7）。



写真6 生徒による映像作品《RE/MAP 香美》の1シーン

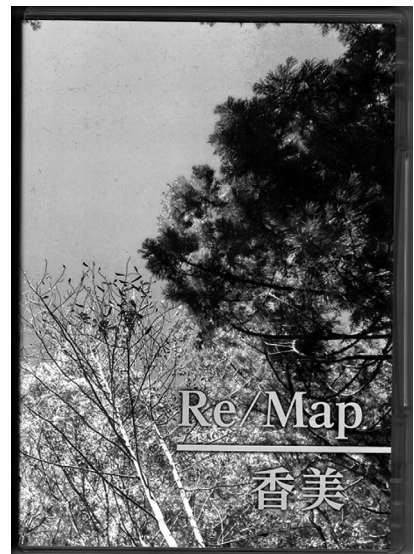


写真7 生徒による映像作品
《RE/MAP 香美》DVD ジャケット

4. 第4期実践「高校生が探る小さい地域の“いい感じ”」

2014年度からは地域創造類型が改組され、地域・アウトドアスポーツ類型地域創造系となり、同時に学区がはずれ兵庫県立高校でははじめて全国募集を開始した。時期はおりしも、消滅可能性都市論（2014年5月）¹⁵⁾の公表ショックが香美町を襲い、行政も地域の人びとが地域消滅に対して根拠のない不安感に苛まれる時期であった。その一方で地方創生が2014年9月にはじまり、行政としては人口ビジョンや総合計画などにその要素を入れ込んでいく時期でもあった。この年度から再度1年生を担当することになった筆者（筒井）は香美町協働のまちづくり推進会議の委員も務めてい

たことから、当時の地域の不安感払拭と行政のビジョン作成と地域創造系の授業を連動させることを企画して、地域・アウトドアスポーツ類型地域創造系1期生（村岡高校第55期生）による小規模集落の地区力点検と魅力発信プロジェクトを実施することとした。

あわせてこの年から教育コーディネーターの設置が実現した。筆者の研究テーマである“協働の段階”の都市-農山村交流の延長線上で行政制度として発足した地域おこし協力隊制度を活用して、香美町の教育コーディネーターを雇用し、香美町に所在する村岡高校と兵庫県立香住高校の魅力化に取り組むこととなった。この教育コーディネーターが本稿の筆者の一人である安田である。教育コーディネーターは単に授業の手伝いをするだけではなく、小規模な自治体で高校を活かしている実践例の調査として北海道の音威子府村立北海道おといねっふ美術工芸高校と北海道立下川商業高校の視察を実施し、また島根大学が実施したふるさと魅力化フロンティア養成コースに参加するなど、積極的な教育コーディネートの基礎作りも行った。

香美町内には120の集落が存在している。このうち高齢化率40%以上で50世帯未満の集落を香美町役場では小規模集落と位置付けており40集落が該当する。総合計画を策定するにあたって行った住民アンケートにおいて「地域資源・自慢・魅力の回答率が低い」、「地域づくり積極傾向が高い」、「交流可能性が高い＝高校生徒のコラボの可能性はある」、「地域づくり参加傾向が高い」という4つの条件により抽出した集落のうち16集落を今回の地区力点検と魅力発信プロジェクトの対象とした。地区力点検とは2002年に総務省過疎対策室が刊行した手引きにのっとり行ったもので、地区の持っている総合的な力（地区力）を多面的に点検することにより、地域の課題等を明らかにし、地区力の創造に向けた方向性や具体的な活動の芽を見出していくことを目的としている。これにより高校生が地域の課題をエモーショナルに受け取るのではなく、できる限り客観的な事実として対峙することを目指した。その中で見えてきた魅力をどう表現するかもテーマとした。実はこれもお手本がある。鹿児島県奄美大島に位置する宇検村と大和村ではそれぞれの集落を紹介するガイドブックを作成している。それは地域の比較的若い世代が、その感性で感じたものを文字化したものであり、集落史とは異なるものである。筆者のゼミを卒業した学生の中に宇検村出身者がいたこともあり、宇検村役場でこの事業の担当者に意図や作成方法をヒアリングして、村岡高校の授業に活かすこととした¹⁶⁾。

高校生が集落調査（写真8）を始めた1年生後半から2年生前半は地域住民が語る「地域の魅力」の記録を行っていている感があったが、そこには高校生の感性が入っていないことに気が付いたため、“いい感じ”を合言葉に、ワークショップを行いながら五感で感じたことをできる限り見える化をしていった。2016年7月には村岡高校主催の教育講演会において小規模集落サミットを実施して、調査を行わせていただいた集落の方々と高校生ならではの集落の見方を共有し、意見交換を行った。さらに3年生では「魅力発信」がガイドブック作成に矮小化しないよう、テーマ性をもったその活用方法を検討することとした。幸い2016年の香美町の新人職員研修の一部を村岡高校で引き受けることにもなったので、その該当職員と高校生とがワークショップ形式で検討を進めた。その結果、「めざせコミュニティマスター—まちから都市への地域活性化反応—」、「街にないものあります—田園回帰—」、「地域で育てる未来世代—香美町で日本一の子育て



写真8 集落調査の様子

を一、「イイ感じを合言葉に—You は香美町で何をする?—」の目的別活用法を作成して、2016年10月の村高フォーラムにおいて提案するとともに、2016年12月2日には香美町長や幹部区職員に対してプロポーザルも実施した¹⁷⁾。

成果は高校生だけではなく香美町役場新人職員という「大人のワカモノ」も巻き込みながら、香美町の“若者力”を活かして発信を試みたガイドブック『むらの風景—集落ガイドブック Vol.1』(写真9)として発行をした。香美町の小規模集落40のうち、取り上げられることができたのは16集落のみで完結していない。そのこともありVol.1としたのである。2017年度からは地域創造系で蓄積した手法を活かして「村高発 地域元気化プロジェクト(総合的な学習の時間)」において、引き続き小規模集落の魅力発見と発信を継続していくこととなっている。その意味で村岡高校が、単発の地域探求ではなく、継続的な地域探求を目指す一つのモデル構築を試みているといえよう。



写真9 生徒作成ガイドブック『むらの風景』

5. 第5期実践「大学生をロールモデルとした調査活動」

筆者(武田)は、2015年4月より、5期目の村岡高校「地域創造系」クラス(以下、第5期クラスと記す)を受け持っている。専門は美術教育学であるが、地域資源を活用した教材開発を継続的に行っており、当該クラスの授業では、兵庫県美方郡香美町(村岡高校所在地)で展開される地域資源を活用した教育活動全般を対象とし、「ふるさと教育の継承と実践」をテーマとして設定している。香美町教育振興基本計画(2012)では、「町の活性化には、今後予想される「知識基盤社会」をたくましく生き抜くための「確かな学力」と、ふるさとの文化や伝統を学び、これらを心の糧とし「ふるさと香美」を大切にしようとする心をもった子どもの育成が不可欠¹⁸⁾として、「ふるさと香美」の将来を担う人材を育成し、活力ある町づくりを進めるために、ふるさとの良さを生かすことのできる人材育成¹⁹⁾が進められている。つまり、香美町においては、「ふるさと教育」は地理解の範疇に留まらず、広く地域に貢献する人材の育成も視野に入れた教育計画となっている。その多くが香美町出身者である村岡高校生にとって、「ふるさと教育」は実践の体験者であり、成果の体現者となるものである。したがって、先述のテーマに基づく授業は、自己参照を通じて地域創造の当事者意識を自覚するプロセスに資するものとして位置づけることもできる。

第5期クラスの授業は、次の3つの段階を踏みながら進められている。第1に、自己の学習体験と「ふるさと」に対する知識・理解の関連性を可視化する活動を通して「ふるさと教育」の背景を理解する。第2に、フィールドワークにおける多様な対象への迫り方と実態把握の方法を理解し、香美町教育委員会の「ふるさと教育」人材バンクに登録されている「ふるさとのしり博士」に対してインタビュー調査を実施する。第3に、インタビュー調査で得られた情報をまとめて地域社会に発信するとともに、学校現場と「ふるさとのしり博士」が協同的に実施する「ふるさと教育」の実践に参画する。つまり、第5期クラスの授業は、村岡高校生にとって「ふるさと教育」を“受ける側”から“行う側”へ次第に変化を遂げていく場となることを念頭に置いて計画されたものとなっている。そのなかで、香美町内で育つ若者として「ふるさとで何が学ばれるか」について一層自覚的となることを期待している。

当該授業では、前述の「地域創造教育サポーター」として村岡高校より委嘱された大学生が、ティーチング・アシスタントの役割を担っていることが特徴的である。大学生は、鳥取大学地域学部の開設科目である「地域調査実習」において、筆者が指導を担当している「地域教育学科（学部改組に伴い、2017年度より「人間形成コース」に名称変更）」に所属するグループのメンバーであり、2015年度は4名、2016年度は3名、2017年度は6名が所属している。筆者のグループでは、毎年、香美町をフィールドとした「ふるさと教育」の実地調査を継続的に行っている。加えて、地域教育学科の大学生は、普通の大学の授業においては教育学を中心として履修しており、その多くが教員を目指している。したがって、当該グループのメンバーが村岡高校でティーチング・アシスタントを行うということは、村岡高校生にとって、フィールドワークの先行実施者であり“見習い”段階の教育実践者が身近に存在する状況をつくり出すことにもなる。つまり、大学生は生徒たちにとってロールモデルの役割を果たすこととなるのである。本節では、左記の点に特に傾斜をかけながら、第5期クラスの授業について概観していく。

2015年度冒頭では、導入段階として、まず「地域創造系」としての3年間の活動の見通しを伝え、第1～4期の生徒が地域をフィールドとして何を調査しているのかを理解する場を設定した。実際の調査では自らが日常生活を営む場をフィールドとするため、“身近で見慣れた存在の意識化と再評価”を基調として授業を進めた。また、大学生との交流活動を実施する前段階として、ビデオレターを交換し、事前に互いの存在を知る契機も設けた。大学生と初めて対面した授業では、大学生が「地域調査実習」の一環として既に調査に入っていた村岡の城下町を共に散策する活動を行った。その頃は、大学生もまだフィールドワークに取り組み始めたばかりの段階であり、その面白さや難しさを初々しく語る対話場面を取り入れることで、生徒たちが調査現場のリアリティーを感じられるようにするねらいがあった。続いて夏休み明けには、実際に「ふるさとものしり博士」の方に村岡高校までお越しいただき、授業内で大学生が半構造型の形でインタビューする活動を行った。生徒たちにとっては、調査の実施者と対象者との間で交わされるやり取りについて間近で見る機会となる（写真10）。授業前に、大学生は「ふるさとものしり博士」の方に調査の趣旨説明を行っており、ある程度対話の方向性が共有化されたなかでの実践となっているが、当然、インタビュー中には、話題が広がっていくなかで大学生側の意図通りに進まない状況も起こってくる。ライブでなければ生まれない臨場感に接する経験が、そのうち生徒自身が調査を行う際の糧となることを期待した。年度末にかけては、我が国の郷土（地域）教育の歴史の概略や香美町の「ふるさと教育」の実施計画などについて講義した上で、2つのグループワークを実施した（ここでの活動については、大学生は参加していない）。1つは、生徒自らが学校内外で受けてきた「ふるさと教育」について、校種別にその内容を図表化して整理する活動である。もう1つは、香美町教育委員会から戴いた「ふるさと教育」の実践事例集を読み、各実践の魅力と課題、改善案を検討する活動である。つまり、ここでの授業内容は、教員をはじめとする学校関係者の想いと、学習者であった自らの経験とを、生徒たちが内省的に突き合わせていくものとなっている。各校区ではそれぞれ特徴的な実践が展開されており、グループワークの対話場面は、生徒たちが互いに異なる経験談を披露する場となった。



写真10 大学生によるインタビューの参観

2016年度冒頭は、生徒たちが日常的に接する話題を取り上げながら、物事の捉え方として量と質の2つの方向性があることを指摘しつつ、フィールドワークにおける各種方法論を解説する授業を展開した。加えて、「地域創造系」クラスが伝統的に行ってきた調査の特性について理解を促した。第1に、調査目的が対象と関わっていくなかで見いだされる側面を持つことであり（仮説生成法）、第2に、調査の過程のなかで対象が有する課題を解決する可能性も有していることである（アクション・リサーチ）。これらの講義を足掛かりとしながら、2015年度末に扱った「ふるさと教育」の実践事例集について、実際にどのような調査ができそうか、その可能性を検討していった。夏休み明けには、インタビュー調査法に焦点を当て、その理論を学び、実践形式でトレーニングする授業を行った。ここで再び大学生が登場し、自らの経験に即しながらインタビュー調査の留意点について生徒たちに伝える場面を設けた。その流れを受けて、今度は大学生の目の前で生徒たちが「ふるさとものしり博士」に半構造型の形でインタビューする活動を実施した²⁰⁾。生徒は3~4人が1グループとなり、対象者に「ふるさとものしり博士」となった経緯や取り組み内容などを聞き取っていくのであるが、各グループには大学生が入り、生徒たちの活動の様子を観察するように設定した（写真11）。インタビュー終了後、大学生に評価点と改善点について指摘してもらい、併せて、「ふるさとものしり博士」にも講評を頂いた。大学生からは、失敗談も交えた自身のインタビュアーとしての成長過程の語りもあり、実施直後にインタビューの難しさを口々に吐露していた生徒たちにとって、フィールド調査で必要となるスキルは実践を通して学ばれる側面があることを理解する場となった。その後、人材バンクに登録されている他の「ふるさとものしり博士」にも住居先でインタビューを実施し、音声記録をトランスクリプトとして書き起こしていった。年度末にかけては、当該記録を読み込みながら、そもそも「ふるさとものしり博士」とはどのような存在なのか、自らの見解を持つための話し合いの場をもった後で、彼らの存在を地域社会に発信するためのポスターを個別に制作する活動へとつなげていった（ここでの活動については、大学生は参加していない）。ポスター制作は、ワールドカフェの形式をとって全員でコンセプトを練り上げ、必要なコンテンツを共有した上で進めており、基本的にレイアウトは生徒たちに任せている。



写真11 ものしり博士へのインタビュー実践

2017年6月現在は、ポスターの最終校正を行うとともに、インタビュー対象者となっていただいた「ふるさとものしり博士」との「ふるさと教育」の実施に向けて、準備を進めているところである。生徒らが創案した実施計画に対して、大学生らが評価点と改善点を指摘しながら具体化させている。実施にあたっては、大学生らによる評価と教育的効果の分析も適宜行う予定である。左記の取り組みは、教員を目指す大学生にとっても有益な経験となるだろう。

以上、「ふるさと教育」の実施状況に関する調査と、そこで得られた情報を活用した授業づくりに取り組む第5期クラスの活動状況について紹介した。今後は、卒業時期に向けて活動の成果を冊子としてまとめ、香美町教育委員会に報告するとともに、町内の学校や社会教育施設等に配布する予定である。本実践の特色として、大学生が生徒らにとってロールモデルとなるように進めたことを挙げた。学校がベースとなる社会的実践は、教員側で全てがお膳立てされた活動のなかで展開されるのではなく、成長途上にある者同士の相互作用のなかで、地域の大人とのフォーマルな付き合い

方を段階的に習得していった方が、より自然な学びのプロセスが創出されるのではないかと考える。その意味で、生徒らの活動報告は、地域の若者が主体となって地域社会と学校教育をつないでいく方向性を含有しており、またそれは地域創造の方略の1つとして検討する価値があるのではないかと期待する。香美町内の教育計画のビジョンを更新する話し合いが行われる場において、本実践が議論を活性化させる話題提供元となることを願っている。

IV. 総括

1. 「地域創造系」における教育実践の効果と課題

生徒の取り組みの様子の観察やコメントシート、卒業後の集まり（2017年3月17・18日村岡区中央公民館）などにおける発言を元に、授業効果について考える。まず、生徒に対する教育的効果としては、積極的かつ楽しみながら研究調査を進められ、地域を探求することや調査研究することへの関心を促すきっかけに結びつけられたと考える。また、自ら映像メディアを用いて調査や作品制作を進めた点について、特に生徒たちからの積極的な反応が示されており、例えば大学入試を経験した生徒のなかには、面接やプレゼンテーションなどで本授業での実践を紹介した、という者も複数いた。自らが主体となって行った特徴的な活動、という意識を生徒たちが持っていたためだと考えられる。以上をまとめると、次のような授業効果があったと考えている。

第1に、地域社会の多層性や、個性、特徴への関心を促すことに寄与した。第2に、学生が探求的、かつ主体的にテーマを作成したことで、調査・研究を行うことに対する意欲が促された。第3に、いわゆるアクティブラーニング、すなわち受動的に生徒が授業参加するのではなく、個々が「主体的な生徒」として活動する機会を設けることができた。なお、これは少人数形式の授業であったことによって可能となった点である。第4に、映像という、通常の学習では発信のための方法として扱うことが比較的少ないメディアを通じて調査研究、発表を遂行することで、「主体的な生徒」の視点を、言葉や文章以外の方法を交えて伝えたり、まとめたりする可能性を体験することができた。

これらの点から、本授業は、生徒たちが地域社会を複層的に捉え、それを自ら探求し、語る視点を持つための導入として機能したと考える。また副次的効果として、授業・生徒たちの活動を介しながら、地域住民、地域おこし協力隊、大学生、高校教職員、大学教員など、授業に関わる人々の関係性が形成されていった点も挙げることができる。授業の運営体制や継続を考えたとき、この点は重要であろう。これは、上述の内容を筆者（小泉）と生徒だけですべて進めていくことが困難であったため、自ずとさまざまな人々の協力を得ながら進めていったゆえの効果とも言える。一方、課題として、大学・高校間の距離や学年暦の違いなどに起因するスケジュール調整の難しさのほか、2ヶ月に1回程度の授業であるため、生徒に授業の継続性を感じさせることの難しさがあることが挙げられる。また、高校・大学双方の担当教職員や地域おこし協力隊の異動・退職などの事由によって、継続性が阻害されてしまう部分もあり、授業に関わる主体が入れ替わっても授業継続をはかるための枠組みを考慮しておくことが潜在的な課題と言えるかもしれない。しかしながら、本授業の枠組みは、小泉・福田（2015）で指摘されているように、高校と大学双方にとって、地域を媒介とした新たな高大連携の展開の可能性を開きうる実践の一つと考えられる²¹⁾。ゆえに、今後の継続的発展を強く期待したい。

2. 「アウトドアスポーツ系」における教育実践の効果と課題

現在、筆者（関）は2014年より改編された「地域アウトドアスポーツ類型」の「アウトドア

スポーツ系」の担当として協働的に活動しているが、基本的には前身の「地域創造類型」と同様に健康・スポーツの視点で関わっている。尚、「アウトドアスポーツ系」も地域創造類型の筆者が担当した2期生をモデルに、地域のスポーツ課題に関して課題を探求しているところである。

村岡高校の「地域創造類型」におけるスポーツによる地域活性化は、村岡地域にどのような影響を与えているであろうか。正確な検証は今後、行う必要があると思われるが、筆者の実感では、地域と共存関係が強固になっていると思われる。村岡高校生の保護者の生活や労働の場が、直接、村岡高校の学習の場になることも珍しくなく、学校外で活動を行えば簡単に知り合いに巡り会うコミュニティである。今回、事例とした2つのイベントの他にも、村岡高校生のサポートがなくては存続しえないものもあるだろう。また、地域住民も村岡高校生に対してある種の期待感を持って接しており、地域で教育していくという姿勢も感じられる。高校生が未成年であることから、行き過ぎると使い勝手のいい労働力となる懸念はあるが、現状では「地元の誇り」「地元の後継者」として好意的に受け入れられているであろう。しかし、ここまでの信頼を地域住民から得るまでには、これまでの教職員の努力が多岐にわたると容易に想像できる。事実、筆者の関わった学習展開においても、実行委員を始め多くの関係者との調整や情報提供は、単に高校教員という立場だけでは到底なし得ず、教職員の多くがこの地域出身や地域住民であり、村岡高校の衰退が村岡地域の衰退という危機意識を共有していることに他ならない。したがって、近年、地域系高校として組織改編を行う高校がみられるが、どこでも「村岡方式」が適応できるとは限らず、長い年月をかけて築かれた地域住民と高校の信頼関係が基盤となっていることが必要であろう。逆に、その信頼関係なくしてこういった、地域を活用した教育活動の展開はできないであろう。

さらに、そういった地域の期待を背負った高校生は、今回のような活動を通して多くのことを学んでいると思われる。課題の創出、仮説の設定、調査、分析、課題解消のための実践、評価等の一連の活動を、身近な地域で行うことによって、自分たちの生まれ育った地域を、より現実的な生活の場として認識し、大人や社会を体験することができたであろう。また、学校生活では決して関わることのない多くの人々と触れ合うことで、コミュニケーションや表現力の重要性を認識できたであろう。単に、地元に対する愛好的な態度の形成を促しただけでなく、地元の魅力と課題を理解したうえで自分にできることは何かを問う3年間であったと思われる。身近な地域を学習の目的達成の「場」として活用するだけでは、利害関係が明確な地域社会では敬遠されるかもしれないが、当事者として地域で育っている高校生だからこそ、地域全体が教育活動を容認していると思われる。この点は、大学教育における大学生の地域活動や地域を活用した実習とは大きく異なる点であり、長い時間と労力が必要であろう。

今回は筆者が担当した、スポーツから地域課題を検討した事例であるが、たまたまテーマがスポーツなだけであって、その他のテーマでも同様な展開は可能であろう。高校生という心身ともに発育発達が著しく感受性が豊かな時期に、自分のルーツと関連する「地域探求」は非常に有意義であり、より深い学びに発展する可能性が感じられると思われる。

V. 結びに代えて

3年間教育コーディネーターとして村岡高校と地域を行き来しながら活動してきたなかで、高校が立地する村岡地域や連携中学がある小代地域、関宮地域には、教育を大切にしている伝統が地域にあるのだと感じることが多々あった。高校生のために多くの地域の方々から有形無形のご支援を賜ったのは、そうした地域特性があったからだろう。また、一人一人の生徒の成長を願い、時に厳しく、

時に温かく指導している教職員集団があるからこそ、通常業務の上に地域活動が加わる村岡高校の教育活動が実践できているのだろう。このように、教育を大切にする地域の伝統文化の上に、現在の地域住民の温かいご支援と、それに応えようとする高校の職員集団の実践が結実し、今の村岡高校の教育活動があるのだと確信している。このような地域でこれからも若者が学び育ち、ゆくゆくは世界の未来を築く一人として力を尽くしてほしい。そして、この地域で人の営みが継承されていくことを強く望んでいる。

【謝辞】

本稿を作成するにあたっては、鳥取大学平成 29 年度学長裁量経費「高大連携による地域系高校の実践型教育を通じた人材育成の展開」を使用した。また、本稿で取り上げた高大連携事業に関わる取り組みには、平成 26 年度学長経費「コミュニティマネジメントを支える地域と教育のシステム構築—地域系高校をめぐる高大連携の展開—」、平成 27 年度学長裁量経費「地域の人材育成のための地域系高校を中心とした連携教育の展開」、平成 28 年度戦略 3「地域系高校における実践型教育を支える地域リテラシーモデルの構築」のサポートを受けた。

【注】

- 1) ベネッセ教育総合研究所，2005，「今後の高大連携はどこへ向かうのか？」，『VIEW21』，4月号。
- 2) 高崎経済大学産業研究所編，2013，『高大連携と能力形成』，日本経済評論社，pp. 39-40。
- 3) 澁谷義人，2016，「社会科の地域学習と地域系高校」，『研究紀要』，第 13 号，兵庫県高等学校教育研究会社会（地理歴史・公民）部会編，pp. 29-34。
- 4) 田中哲也・今井一之・山根俊喜・筒井一伸，2014，「動き始めた地域系高校〈2〉——「地域探求」というシステム——」，『地理』，2014年6月号，pp. 100-105。
- 5) 千田忠，1995，「地域教育計画論研究の系譜と計画主体」，『社会教育研究』，第 15 卷，北海道大学教育学部社会教育研究室，pp. 37-39。
- 6) 文部科学省，2013，『第 2 期教育振興基本計画（平成 25 年 6 月 14 日閣議決定）』，p. 15。
- 7) 中央教育審議会，2015，『新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について（答申）』，p. 8。
- 8) 文部科学省，2016，『「次世代の学校・地域」創生プラン～学校と地域の一体改革による地域創生～』，p. 6。
- 9) 安達生恒，1970，「過疎の実態——過疎とは何か，そこで何がおきているのか——」，『ジュリス』，No. 455，pp. 21-25。
- 10) 小田切徳美，2009，『農山村再生——「限界集落」問題を超越して——』，岩波書店，p. 42。
- 11) NPO 法人日本上流文化圏研究所が作成したサイトで 1998 年に開設された。サイトの URL は <http://www.joryuken.net/2000/> である。
- 12) COMMUNITY TRAVEL GUIDE 編集委員会編，2012，『海士人——隠岐の島・海士町 人々に出会う旅——』英治出版。
- 13) 鳥取大学地域学部・兵庫県立村岡高等学校，2015，「スポーツイベントを通しての地域活性化」。
- 14) 鳥取大学地域学部・兵庫県立村岡高等学校，2015，「笑顔にであえる瞬間 みかた残酷マラソン お・も・て・な・し」。
- 15) 増田寛也，2014，『地方消滅——東京一極集中が招く人口急減——』，中央公論新社。少子化と人口減少が止

まらず、存続が危ぶまれると指摘された 896 市区町村を「日本創成会議」（座長・増田寛也元総務相）が発表した。

- 16) 宇検村では『ハート降るシマ宇検村ガイドブック』を刊行し、以下のサイトで公開をしている。
<http://www.uken.net/rk/files/filelink/guidemap.pdf>
- 17) その様子は 2016 年 12 月 3 日の神戸新聞においても紹介をされた。
- 18) 香美町教育委員会, 2012, 『教育振興基本計画 平成 24 年度~平成 33 年度』, p. 1.
- 19) 香美町教育委員会, 2012, 前掲書, p. 6.
- 20) その様子は, 2016 年 10 月 1 日付けの日本海新聞において紹介された。
- 21) 小泉元宏・福田恵子, 2015, 「地域社会形成における新たな高大連携の可能性」, 『地理』, 2015 年 9 月号・10 月号. 近年の地域系大学による高校との連携を図る取り組みが, 従来の高大連携・高大接続における, エリート教育や学生の多様化を目指す視点とは別に, 地域社会を介した新たな高大連携の可能性を開きうることを指摘している。なお, 鳥取大学と村岡高校の取り組みについても, 一部言及されている。

「2017 年 6 月 2 日受付, 2017 年 6 月 22 日受理」